
魔法少女リリカルなのはStrikerS KH

ニクス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのはStrikers KH

【Nコード】

N2349Y

【作者名】

ニクス

【あらすじ】

キングダムハーツのソラとリクが、『魔法少女リリカルなのはStrikers』の世界に来てしまった
そして動き出す闇の存在、キングダムハーツを手に入れるために
ソラたちは、彼らの計画を阻止することが出来るのだろうか

まだ見ぬ世界へ（前書き）

はじめまして、ニクスと申します。

初めて執筆しますので、誤字脱字や表現が下手かもしれませんがよろしく願います。

まだ見ぬ世界へ

光と闇の間の世界で、ソラとリクが協力し、ゼムナスを倒すことができた。

その空間に存在する見知らぬ浜辺にいた二人の前に、流れ着いた瓶中にはかつてデスティニーアイランドの浜辺に流したカイリが書いた手紙が入っていた。

カイリの手紙を読み終え、目の前に光が差し込み扉が開いた。それを見た二人は、共にその扉の中に入っていた。

これで自分たちの世界に帰れると思った二人だった。

だが、その世界は二人の知らない世界だった。

まだ見ぬ世界へ（後書き）

どうだったでしょうか？

まだ一話だから表現が下手かもしれませんが、これからよろしく
お願いします。

ここは、何処だ？ (前書き)

どうもニクスです。
連続投稿です。

ここは、何処だ？

ミッドチルダの郊外の森

そこには、ソラとリクが眠っていた。

『う、うん。あれ？ここは、何処だ』

『おい、リク！起きろよ！』ソラは、リクを起こし始めた。

『なんだよ。ソラ、何かあったのか？ってここ何処だ？』

リクは、周りのを見渡した。

二人の知っている世界なら、海の近くなので、波の音が聞こえてくるはずだ。

だが、ここからでは、森の木々が風で揺れている音だけだった。

『なあ、リク。まさか、違う世界に来てしまったのかなあ』

ソラも周りを見て、ここが違う世界だと思い始めた。

『なあ、まだ明るいから少し歩いて進まないか？』

と、リクが提案した。

『確かに森を抜けるには、1日で済むとは思わないけど食料とかも、確保しないといけないし、そうするか！』

そうして、二人は森の中を進み始めた。

時空管理局（前書き）

どうもニクスです。

今回は、機動六課の話です

時空管理局

↳機動六課 管制室↳

「なんだ！この魔力反応は、小規模だが次元震発生した！」

管制室にいたグリフィス・ロウランが、モニターで作業中に魔力反応を観測した。

「八神隊長に報告しないと！」

グリフィスは、すぐに別のモニターを表示し八神はやてに連絡した。

↳機動六課 隊長室↳

そこには、八神はやてが数日前に起きた事件に関してガジェット・ドローンの情報を見ていた。

「前の事件で、新型のガジェットがでてた。これは、本格的に動き始めたと考えたほうがええんやろうなあ」

ピピっピピっ

「はい、こちら八神。どないした？」

「こちらロングアーチ。ミッドチルダ郊外から小規模ですが、次元

震を観測しました。」

「ほんまか！分かった。何かあるかわからんから、こっちからスタ
ーズとライトニングの連絡するわ」

はやては、ロングアーチからの連絡を受け、すぐに念話でなのはと
フェイトに報告した。

（こちらははやて、なのはちゃん、フェイトちゃん聞こえるか）

（聞こえるよ。はやてちゃん）

（こっちも、聞こえるよ。はやて）

（あんな、ついさっき小さいけど次元震が発生したんや。悪いんだ
けど、ちよっと見てきてくれへんかな？）

（わかった。こっちは、フォアードのみんなに伝えてから行くから
フェイトちゃん先に行って）

（うん、いいよ。それじゃ先に行くね。なのは）

そして、フェイトはすぐに移動した。

「バルディッシュ、セットアップ」

フェイトは、バリアジャケットを身にまとい、飛び立った。

「こちら、ライトニング1からロングアーチへ。次元震が発生した
場所をバルディッシュに送ってもらえるかな？」

「こちらロングアーチ。座標データを今から送ります」

「マスター。座標データを受信しました」

「バルディッシュ、見せて。ここから少し行った先の森かあ。もしかしたら時空漂流者かもしれない。生命反応があったら教えてねバルディッシュ」

「了解しました。マスター」

そして、移動し始めた。

（訓練所）

そこには、なのはとフォアードたちがいた

「はーい、みんなあ。訓練の途中なんだけど、急用が出来たので今日はここまでにします。前の事件から続けて訓練してるからちゃんと体を休ませてね。」

「」「はい」「」

「では、解散」

そう言うと、疲れ気味のフォアードたちは機動六課の隊舎に戻って行った

「こちら、ロングアーチからスターズ1へ。次元震があった場所の座標データを送ります」

「了解」

「受信しました。マスター」

「ありがとう、レイジングハート。それじゃ、いこうか」

「レイジングハート セットアップ」

なのもバリアジャケットを身にまとい移動した。

時空管理局（後書き）

個人的ですが、感想をもらえると嬉しいですね。
SEEDさん、感想ありがとうございます。
これからお願いします

出会い（前書き）

どうもニクスです。

今回、ソラ達となのは達が出会います
では、どうぞ

出会い

くミットチルダ郊外の森 上空く

先に、出動したフェイトが周囲の探査を開始していた。

「この辺が、反応があった場所だね。バルディッシュ、生命反応はある？」

「はい、反応が二つあります。生命反応から人です。共に現在、移動中です」

「時空漂流者だね。すぐに、会って保護しないと」

「こちらなのは、もう少しで目的地に付くよ。フェイトちゃん、何か変わったこととかあった？」

「あ、なのは。もしかしたら時空漂流者かもしれないだよ。それで今から会いに行ってみるね」

「了解。それじゃ、こっちも急いで向かうね」

「うん、分かった。それじゃね」

フェイトは、ソラとリクたちのいる場所に向かった。

く森の中く

ソラとリクは、共に行動していた。

「うーん、それにしてもなんにもない森だな。それに広いなあ」

「どうしたソラ、ギブアップか？」

リクは、ソラに向かってつぶやいた。

「ギブアップなんか関係ないだろう、リク。それに広すぎるだろう。この森」

「たしかに、いくら歩いても全然変わらないからな。うん？」

リクは、近づいてくる者に反応し、手にソウルイーターを構えた。

「どうしたリク？なんでソウルイーターを出してんだよ？」

「静かにしろソラ、何か来る！」

「え！本当かよ！」

そしてソラも、キーブレードだし構えた

すると、上から金髪の女性が降りてきた。

「あんた、何者だ。敵か」

リクは、冷静に女性に向かって話した。

「え？敵？ 違うよ。私は、時空管理局の者です。ただお話をしたいだけです。武器を下ろしてくれるかな？」

女性は、ソラとリクに話した

「じくうかんりきよく？なんだそれ？」

ソラは、女性が話したことが分からなかった

「えーとね。君たちがいた世界や他にもたくさんある世界を管理している仕事のことなんだ。」

それで、この近くで魔力反応があったから調べにきたんだけど、君たちの反応を見つけたから来んだよ。君たちの服装や武器を見ると違う世界から来たみたいだね」

「やっぱり違う世界にきたんだな、俺たち。」

ソラは、リクに向かって言った

「そうらしいな」

「あれ？なんか別世界になんども行ったことがあるの？」

女性は、二人の言っていることを聞いて質問をした

「うん、結構いろいろな世界に行ったことがあるから慣れたかな」

ソラは、女性の質問に答えた

「そうなんだ。あっ自己紹介がまだだったね。私は、フェイト・T・

ハラオウン。よろしくね」

「俺は、ソラ。こっちはリク」

お互い自己紹介をした

「フェイトちゃん」

「あっなのは」

すると今度は茶髪の女性が降りてきた。

「ごめんねえ、フェイトちゃん。遅くなって」

「ううん、ついさっき彼らに出会ったところだよ。」

「はじめまして、私、高町なのはです」

なのはは、二人に自己紹介をした

「二人は、ソラとリク。こっちの世界にさっき来たみたい」

フェイトは、ソラとリクをなのはに紹介した。

「そうなんだ、二人とも悪いんだけどこれから私たちのいる機動六課に行って君たちのこととかいろいろ聞きたいから連れていくけど、いいかな？」

なのはは、二人に質問をした

「ソラどうする？」

「このまま森にいたらどうなるかわからないし、それにここの世界のことも知っておきたいからな」

二人は、なのは達について行くことにした。

出会い（後書き）

あんまり上手く表現できない。
アドバースなども募集中です

ソラたちの世界（前書き）

どうもニクスです。

アクセス数が2000を超えました。

自分でもびっくりしました

今回は、ソラ達の世界をなのは達に説明する話です。
では、どうぞ

ソラたちの世界

（機動六課前）

ソラとリクは、なのは達と共に移動して現在、機動六課隊舎前に来ていた

「ここが、私たちが働いている機動六課だよ」

「すげー、ここでののはさんとフェイトさんが働いてるんだ」

ソラは、隊舎の周りを見て驚いていた

「それじゃ、君たちのことを聞きたいから案内するね」

4人は、隊舎の中に入って行った

入ってすぐに、なのはの目の前にモニターが開かれた

「おかえりなさいですう。なのはさん、フェイトさん。あれ？そちらのお二人は誰ですか？」

「彼らはね、さっき起きた次元震でこっちの世界に来てしまったみたいなんだよ。それでねリイン、はやては部屋にいる？」

「はい、いますよ。」

「それじゃ、今から行くからはやてに伝えておいてね」

「分かりました。それじゃ、お部屋で待ってますからね」

そしてモニターでの通信が終わった

「それじゃ、行こうか」

（隊長室前）

コンコン

なのはは扉をノックした

「入ってええよ」

すると、中から返事が聞こえた

「今戻ったよ。はやてちゃん」

「ありがとなあ。なのはちゃん、フェイトちゃん」

「はやて、彼らが現場のところにいたから連れて来たよ」

「ようこそ。機動六課隊長の八神はやてです。よろしく」

「二人とも、早速だといくらか質問するけどええかなあ」

「「はい」」

二人は、答えた

「まずは、君たちの世界はどんな所だった？」

「俺たちがいた世界は、小さな島があるごく普通の世界です」

「え？ そうなの。」

「でもさっきほかの世界に、行ったことがあるって言ってたよね。それは、どうして？」

「ちょっと話が長くなるけどいいですか？」

「ええよ。君たちのことを知りたいからね」

「それじゃ、話しますね。きっかけは、小さい時に別世界から女の子が来たのがきっかけです。それまで、自分たちがいた世界の他に世界があることを知らなかったんです。それから俺たちは、世界から出ようと考えました。出発前夜に嵐が来て外に出たんです。外に出ると周りには『ハートレス』と呼ばれる生物がいました。」

「『ハートレス』ってなんなの？」

「それは、後で説明しますね」

「なんとか振り切って、リクに出会うことが出来たんですがリクは闇の中に消えて行ってしまった。俺もハートレスにつかまれ闇に飲み込まれそうになったんだけど、『キーブレード』をおかげで飲み込まれずにすみしました。でも、俺達の世界自体が闇にの込まれてしまったんです。」

「世界が、闇に飲み込まれた？じゃソラたちは、どうやって他の世界行けたんや？」

「俺は、気がついたら違う世界に来てたんだ」

「俺も、闇の中から別世界に行った」

「それから、様々な世界に行ってらリクと再び出会ったけど、俺はリクとカイリを探しに様々な世界にいき、リクはカイリの心を取り戻すために別の世界に行ったんだ。でも、次に出会った時には、オレらは敵同士になってたんだ。」

「え！どうして敵に同士になったんや？」

「それは、この『キープレード』が原因なんだ」

そう言うソラは、キープレードを出してはやて達に見せた

「大きな鍵やなあ」

「このキープレードは、ハートレスになってしまった人をもとに戻すことが出来るんだ」

「それじゃ、カイリって子もそのハートレスになってもうたんか？」

「いや、カイリの場合は肉体から心が離れるときソラの心の中に入っていたんだ。でもカイリの心を取り戻すためには、心を開放するための闇のキープレードが必要だった。そのために、俺は心を闇に捧げた。」

「リク君、闇に心を捧げてもうて大丈夫なの？」

「今は、大丈夫だが初めてのころは闇に溺れて俺に闇の力をくれたアンセムって奴に体に乗っ取られたりしたしな。でも、今は自分の力の力だと認めて使ってる」

「二人の関係や世界に関して、大体分かった。それでな、二人ともこれからどうするんかきめとるんか？」

「いや、どうするも何も考えてないや。今までは、世界を移動する術があったけど、今はないんだよ」

ソラは落ち込んだ

「ほんなら、ここにおらへんか？ここなら住む場所や食べ物もあるからええと思うんやけど」

はやては、二人に提案をした

「でも、その分何かあるんだろ」

リクは、何か裏があると思い聞いた

「リク君は感がええなあ。こっちからは、大変申し訳ないけど二人の力を貸してもらえないかな」

「リク。俺たちは、なのはさん達に助けてもらったんだぜ。お互い助け合った方がいいだろ」

ソラは、賛成のようだ

「はぁ、ソラお前はお人好しすぎるぞ」

リクは、嫌々だが賛成してくれた

「それじゃ、よろしく。ソラ君、リク君」

「呼び捨てでいいよ。よろしく」

「俺も呼び捨てでいい、よろしく頼む」

こうして二人は、機動六課に入隊した

ソラたちの世界（後書き）

こんな感じで、今回はまとめました
多くの皆様、読んでいただきありがとうございます。
これからも、引き続きお願いします

検査と模擬戦 その1（前書き）

どうもニクスです。

今回は、ソラ達の検査などです。

それでは、どうぞ

検査と模擬戦 その1

〽機動六課 隊長室〽

「それじゃ、今からソラとリクには検査とか受けてもらうでえ」

「検査？俺どこも悪くないぜ」

「違うよ、ソラ。魔力量や性質なんかを調べるんだよ。もし二人が戦闘に参加するときにこっちの世界の戦いとかも知らないといけないからね。それにデバイスも用意しないといけないし」

「デバイス？」

「ソラ。俺たちがフェイトたちに会った時に二人は、武器を持っていただろ。たぶんアレだ。」

「あくでも、俺たちはキープレードがあるじゃん。大丈夫なんじゃないか？」

「でも、ハートレスやノーバディには有効だけど、この世界では、どうかわからないだろ」

「確かに言われてみれば、そうかも」

「あんな、その『ハートレス』と『ノーバディ』ってなんなんや？」

「説明がまだだった。人には、心と肉体があるだろ。『ハートレス』は、人の心の闇が膨らみ続けて完全に闇に染まると、その心はハー

トレスになって他の人の心に反応して次々人を襲うん存在。『ノーバディ』は、強い心の持ち主がハートレスになった時、体と魂が消滅するはずが異なる世界に生まれてしまう存在なんだ」

リクが、はやてたちに説明した

「なんか、ややこしい存在やなあ」

「中でもノーバディでは人の姿をしている奴がいた。そいつらは、かなり強かった。」

「あいつら一人ずつ武器や特性が強いからなあ」

「そんな敵とソラたちは、戦ってたんだね」

「話はここにいる間にいくらでもできるから、早く検査にいきましょう」

ソラは、飽きていた。

「そうだね。それじゃ、はやてちゃん二人を検査に連れて行くね」

「うん、おねがいなあ」

そして4人は検査に行った。

（機動六課 医務室）

「シャマル、いる？」

「はい、いますよ」

「こちら、今日から協力してくれるソラとリク。忙しいところ悪いんだけど、魔力測定をおねがいたいんだけどいいかな」

「いいわよ。私はシャル。ここでみんなの怪我を見たり治したりしてまゝす。よろしくね」

「「おねがいます」」

「それじゃ、検査を始めるわね」
そして二人の検査が始まった

検査の結果は、ソラはランクA A A（一）リクはランクA A A（十）だった

「二人ともかなり高いわね」

シャルは、検査の内容を見ながら話した

「すごいね。二人とも」

フェイトは、喜んでいた

「後は、一人ずつ模擬戦してもらうけど、二人ともいいかな？」
なのはは、質問した

「おう」「分かった」

二人は、返事をした

く訓練所く

「ここが、私達が模擬戦や日々の訓練に使っている所でくす」
なのはが、訓練所を紹介した。
でも、ソラ達から見ると何にもない場所であった。

「何にもない所なの？」

「違うよ。待ってて今から出すからね」

「出す？」

ソラには、どうゆうことかわからなかった

隣でなのはは、モニターで何やら操作をしているようだ

「はい。終わったよ」

と、言った時何もない広場から突如ビルがそびえたった

「うわっ！？ビックリした」

ソラは、驚きを隠せず言った
リクも驚いた表情でいた

「にやはは、驚かせてごめんね。」

「さっき言った通りここで、模擬戦してもらいます。対戦相手は、

シグナムとフェイトちゃんがしてくれます」

「シグナムって誰？」

「待たせてすまん。高町、テスタロッタ」

二人は、声の方向を見ると桃色の長髪の女性が立っていた

「私は、シグナム。今回君たちの模擬戦の相手を担当する。よろしく頼む」

すると、シグナムは手を差し伸べた

「ソラです、よろしく」

「リクです、よろしくお願いします」

二人は、シグナムに握手をした

「ああ、二人とも全力で来い」

「それじゃ、ルールだけど時間無制限。対戦相手が行動不能もしくはソラ達が行動不能が決まったら終了だからね。シグナムとフェイトちゃんは、非殺傷の設定でお願いね」

「それじゃ、対戦組み合わせは、ソラとフェイトちゃん。リクとシグナムです」

「あっすいません。起動した状態のデバイスを出してくれますか？」

「いいよ。バルディッシュ」

フェイトは、バルディッシュを起動した。

そしてリクは、ソウルイーターを出し、剣先をバルディッシュに当たった。

どうやら、剣が当たるか確かめたようだ。

「変わった武器だな」

シグナムは、目をキラキラとさせ興味津々のご様子

「こっちは、非殺傷とかは出来ないんで気をつけて下さい」

「分かった。」

「了解した」

「それじゃ、広場に行ってソラとフェイトちゃんは準備してね」

「行こうか、ソラ」

「おう」

二人は、広場に移動した

いよいよこちらの世界に來てからの初めての戦闘が始まる

検査と模擬戦 その1（後書き）

次回は、模擬戦が始まります。

戦闘シーンを文章にしないといけないので更新が遅れるかもしれませんが

せん

まあ今回も、だいぶ考えて書いたんですけどねw

上手く書けているかわかりませんが、アドバイスや感想があると参考になりますので、引き続きよろしくお願いします

検査と模擬戦 その2（前書き）

どうもニクスです。

今回は、ソラとフェイトの模擬戦が始まります
では、どうぞ

検査と模擬戦 その2

（訓練所）

ソラとフェイトは、訓練が始まるのを待っていた。

（こっちの世界で、初めて戦うからなあ 気を付けないとな。それに魔法とドライウゝも試しておかないと！出し惜しみなしの全力でいこう）

ソラは、張り切っていた。

（ソラは、どう戦うのか楽しみだなあ）

フェイトは、目をキラキラ輝かせていた。

「二人とも準備はいいかな？」

「はい」

「うん」

「それじゃ、レディー・ゴー」
なのはの開始宣言で、二人とも動いた。

ソラは、フェイトに向かって走って行った。

（まずは、普通に攻撃しよう）

「でやあ、はっ」

攻撃の隙をつかせない為に連続で攻撃した
フェイトは、簡単にソラの攻撃をすべてガードした

（やっぱり簡単に防がれるか）

そう思ったソラは、後ろに後退した。

（んじゃ、魔法で繋げる！）

ソラは、キープレードを前にかざした。

「ファイア！ファイラ！ファイガ！そして、エアロガ」

キープレードの先から炎属性の魔法を放ち、次にキープレードを後ろに構え風属性の魔法をブースターとして使ってソラは特攻した

「え！？くっバルディッシュ」

「はい、マスター。フォトンランサーシュート」

フェイトは、驚いていた。

ソラの行動が予想外だったからである。

フェイトは、バルディッシュに指示を出しフェイトの周りにある三つの球体を、炎属性の魔法に狙いをさだめ放った

フェイトの魔法は、ソラの炎属性の魔法を打ち消すことはできたが、ソラのスピードが早かった為攻撃を防ぐことが出来ず吹き飛ばされビルに衝突した

「おい、フェイト。大丈夫かー」

ソラは、フェイトが衝突した方向に向かって喋った。

「大丈夫だよソラ。ごめんね、バルディッシュ」

「お気にせず、マスター。それよりも驚きました。彼はデバイスを持っていないのにこれほどできるとは思いませんでした」

「何だかワクワクしてきちゃった」

そう言い、フェイトはビルの中から姿を現した

「それじゃ、今度はこっちから行くよ!」

すると、フェイトは姿を消した

それを見たソラは、辺りを確認した

「消えた!? 何処だ」

ソラは、後ろに魔力を感じ何とかガードすることが出来た

「あぶねえ、何とかガードできた」

ソラは、フェイトから距離を取った

「すごいなフェイト。あんなに早く移動できるんだな」

「それじゃ、こっちからも行くぜ。ブレイブフォーム!」

すると、ソラの服は赤色に変化しキープレードを二本持った

「「キープレードが二本!」「」」

なのは、シグナム、フェイトは驚いていた

見学していたなのは、リクに聞いた

「リク、どうしてソラはキープレードが二本持つてるの?それに服の色が変わったけど・・・」

「それは俺にもわからない。本来キープレードは一人一本しか持てないし、使用するにも選ばれた者だけなんだ。服は、あいつの知り合いがくれたらしい」

リクは、なのはとシグナムに説明した

一方、訓練場ではソラがフェイトに攻撃をしていた

「えいっ!やあ!たあ!はっ!」

フェイトは、ソラが二刀流になった為攻撃の手数が増えガードするのが精一杯だった

「マスター、いったん距離を取りましょう」

「そうだね」

フェイトは、バルディッシュの提案通りにソラから離れた

「結構強いね。ソラ」

「フェイトこそ、あれだけ攻撃しても全然当たらないし息も切れない相当強いな」

「それじゃ、これはどうだ。ウィズダムフォーム」

するとソラの服の色は、青色に変化しキープレードは一本に戻った

「今度は、青色になったね。バルディッシュ警戒していくよ」

「はい、マスター」

すると、ソラは地面を滑るように移動し、キープレードから無数の魔弾が放たれた

（今度は、攻撃が射撃に変わった。連射もかなり速い）

フェイトは、冷静に回避しながらソラの変化を観察していた

「やっぱり、回避されるるよな。なら、マグネラ」

ソラは、磁力の魔法を使った。周囲にある残骸とかは魔法に引き寄せられた

（引き寄せられる！？これじゃ、的にになっちゃう、なら！）

「バルディッシュ！フォトンランサー・シュート！」

フェイトは、球体を一つを作りマグネラのコアに向かって放った

コアの周りは、破壊された残骸が集まっていた。フェイトの魔法は、見事コアに的中して周りは砂埃だらけになった

（ちょっとやりすぎたかな？）

突然、砂埃舞う中キーブレードが一本フェイトに目掛けて飛んできた

「マスター危ない！？プロテクション！」

バルディッシュのおかげで防ぐことが出来た。すると防いだキーブレードは、砂埃の中に戻ってた

「ありがとう、バルディッシュ」

砂埃は消えソラの姿が見えてきた

「あれ？また色が違う。今度は黄色になってキーブレードが二本持ってるね」

なのはとシグナムは、モニターでソラの様子を見ていた

「一体どれだけ変われるんだ」

シグナムはつぶやいた

「服の色が変わるたびに、戦闘スタイルも変えて戦ってるね」

なのはは、戦闘を録画していたらしく別モニターで確認していた

「最初の灰色はバランスタイプで、赤色は近接系に特化と二刀流になって、青色は地面を滑るように移動と射撃を使ってるね」

「状況に合わせて戦闘スタイルを変えることができるオールラウンダーだな」

シグナムはそう言った

「進展があつたようだぞ。高町」

訓練場では

「はぁ・・・はぁ・・・」

ソラの体力はだんだん限界に近づいていた

（ダメだ。ここまで体力が削られるなんて思わなかった。いくらマスターフォームになってもあの大剣状態だと一撃一撃が重すぎる）

フェイトは、ザンバーフォームに切り替えて、戦っていた

原因は、フェイトの攻撃をソラは何度か攻撃を流したり防いだりした為である

「これで最後にするよ！ソラ！」

「行くぜ！フェイト！」

二人は、魔力を貯め始めた

「雷光一闪・・・プラズマザンバーブレイカー」

「ラグナロク」

ソラは、キープブレードの先に集めた魔力を分散させ、目標をフェイトに向かって放った

フェイトは、カートリッジをリロードし魔力を刀身に乘せ斬撃を放った

二人の放った魔力は、ぶつかり大きな爆発が発生した

爆発が発生した為、煙が辺を立ち込めたが、見学していた三人からはようやく見えるようになった

そこには、フェイトが立っていた

そして、ソラは爆発に巻き込まれ気絶していた

模擬戦 第一戦 勝者フェイト・T・ハラオウン

検査と模擬戦 その2（後書き）

始めて戦闘シーンを書きました。

書いてると、だんだん文が単調になってしまいました。
すみません

戦闘シーンを文にすると疲れますね
では、次回もよろしくです

検査と模擬戦 その3 (前書き)

すいません。更新がかなり遅れました
バイトなどであんまりまとめることができませんでした

検査と模擬戦 その3

く訓練所く

ソラは、現在気絶中

フェイトは、ソラを連れてなのは達がいる場所に来た

「ごめん、なのは。ソラを今からシャマルの所に連れて行くね」

「大丈夫だよ、フェイトちゃん。さっきの大技出すときにもう呼んでおいたから」

なのは先ほどの二人が大技を出す体勢になった時急いで連絡したのであった

「来るまで時間がかかるから、ソラには悪いけど次の模擬戦やるよ。シグナム、リクいいかな？」

「当然だ」

「始めてくれ」

シグナムとリクは、返事をした。

シグナムは、先ほどの模擬戦を観戦して表情には出さないが、かなり興奮していた。

そして、二人は移動した

く訓練所 広場く

「リク、お前はどんな風に戦うんだ？」

シグナムがリクに質問した

「始まればわかるだろ」

リクは、シグナムの質問に答えた

「ほう、なら私を楽しませてくれ」

「それじゃ、模擬戦2戦目レディー・ゴー！」

「行くぞ、レヴァンティン」

シグナムは、開始の合図と共に突撃した

一方、リクはソウルイーターを構えただけだった

二人の武器は、互いを押し付け合う形になったがリクは、攻撃を受け流しシグナムの腹部に蹴りをいれた

その結果、シグナムは吹き飛ばされたがすぐに大勢を整えた

だが、シグナムはリクに視線を向けた時陸の姿がそこには無かった

「どうした？こんなもんか」

リクは、シグナムの後方にいて挑発した

「ほう、ずいぶん余裕だな。なら来てみるがいい」

「なら行かせてもらおうぜ」

リクは、体の周りから黒いオーラを出し姿を消した

「またか」

シグナムは、姿を消したリクを見てつぶやいた
後ろから殺気を感じシグナムは振り返った

そこには、リクがものすごいスピードで突っ込んできたがシグナムは回避した

リクは、攻撃を回避されたまま突っ込み続けていたが、また姿を消した。この攻撃が全方向から繰り出されたのだ

「それが、お前の力か。」

そう言うとき高くジャンプして回避した

「ダークカノン」

リクは、攻撃をやめ闇の力を手に集中させ放った

すぐにシグナムは剣で薙ぎ払った

（さてこれからどうするか。あんまり攻撃しても防がれてばかりだし、少しの間あれを使うか）

リクは、体全身を闇の力で纏った。

これを好機と見たシグナムは攻撃を開始し、リクに斬りかかった。
だがこの攻撃は、黒い霧に防がれた。その霧は、形状を変え人に近い物になった。

シグナムは後退し、リクをみた

「なんだアレは！」

シグナムの手は、小さく震えていた
そこには、リクの後ろに黒い人に近い物がいた

「これが俺の力だ！」シグナムは、自分の体が小さく震えているのに疑問をもった

（何故私は、震えている？あの黒い物を見た途端震え始めた。これが、恐怖だということか？だが！）

「私は、烈火の騎士シグナム！こんなことで私は、負けない！」

シグナムは、恐怖を打ち払うように攻撃を与えた
だが、リクの闇により全て防がれた

「レヴァンティン、カートリッジリロード！紫電一閃！はあああ！」

レヴァンティンのリロードで魔力を倍増させリクに一撃を与えた
その攻撃は、リクを少し後退させ腕にダメージを与えた

（こいつの腕にダメージを与えたか。これ以上は長く使うとまずいな）

するとリクの周りの闇は消えた

「何故使うのをやめた」

リクの行動を見て、シグナムはリクに質問した

「この闇の力は、ダメージはそのまま使用者にもくるからな。なら、俺のキーブレードを見せよう」

するとリクの手に先ほどまで使っていたソウルイーターに似たキーブレードを出した

「このキーブレードの名は、ウェイトウザドーン」

「ほう、先程の武器を触媒にしたキーブレードか」

「んじゃ、行かせてもらうぜ」

リクは、攻撃を再開した

一方、観戦側ではソラが目を覚ました

検査と模擬戦 その3（後書き）

また、更新などが遅くなるかもしれません
では、また

模擬戦と検査 その4（前書き）

更新が遅れて申し訳ない
とりあえずどうぞ

模擬戦と検査 その4

く訓練所 ビルの屋上く

「ソラ、大丈夫？」

「大丈夫だよ。フェイト」

「フェイトちゃん。やりすぎだよ」

フェイトは、なのはに注意されてしまった

「あれ？リクの模擬戦は始まったのか？」

「うん。もう最後かな」

く訓練所く

リクとシグナムは、激しい攻撃が続いていた

「リク。おまえとの戦いは本当に楽しい」

「楽しい？そんな風に思われてるのはムカつくな」

シグナムの発言によりリクは、ムカついた

「なら、これならどうだ！」

するとリクは、キープレードを上に向け魔法を放った

だが、上空でその魔法は消えた

「どうした？不発か？」

シグナムは、リクの魔法を見て疑問に思った

そしてリクに、視線を向けるとリクは次のアクションに出ていた

「不意打ちか」

「戦闘に卑怯とかないだろ。それにアンタこそ本気を出してないしな。いや出せないか」

「分かっていたか」

それもそのはずシグナムは、手加減していた

あまりにも本気を出すすぐに終わってしまう

それにこの模擬戦は、戦闘などのデータの記録もしている

相手の戦闘スタイル、技、状況判断なども最大限して貰えばソラとリク、二人のデバイスの作製に関係しているからである

「なら、これならどうだ」

リクは、自分の影を使い自らの分身を出した。

「行くぞ！」

リクは、分身と共に攻撃を始め、先に攻撃を仕掛けたのは分身の方だった

そしてリクは、シグナムの影を踏んだ。するとシグナムの分身を作った

「私の分身までも作った!？」

「こんなこともできるぜ」

リクは、攻撃をしながら言った

シグナムは、リクと二体の影の攻撃を防ぐのに手一杯だった

(分身の連携攻撃が厄介だな。)

「レヴァンティン! 紫電一閃 はあ!」

シグナムの一撃により二体の分身は撃退した

だが、その周囲にはリクの姿が無かった

「また消えたか」

シグナムは周りを見渡した

一方リクはビルの影に隠れていた

(これからどうするかな。普通の攻撃は防がれる。影の攻撃だと時間稼ぎにもならない。はあゝまだまだ俺も強くないとな。まあ今は、出来ることをするしかない。)

リクは、気配を消しシグナムからさらに離れた

(ここなら気づかれても移動に時間がかかるから何とかなるだろう)そしてリクは、ビルの影を利用し多数の分身を作った。中にはシグナムの分身もいた

シグナムは、リクの魔力を察知しすぐさま移動した。するとリクの分身が隠れていて攻撃を繰り返した

（分身は一体か二体までかと思ったがこんなに多く出せるのか）
シグナムは次々攻撃してくる分身を追撃していた

リクはシグナムの様子を見ていた

（魔力のほとんどが分身を出すのに使ってしまったし、この一撃を
当てないと負けるな。さて行くか）

シグナムに向かって移動した

「そこにいたか！レバンティン！全て薙ぎ払うぞ！紫電一閃！」

シグナルの攻撃で、影は次々と消滅していく中リクは最後の攻撃を
仕掛けるため突っ込んだ

だが、シグナムはリクの渾身の一撃を受け流しリクに攻撃を当てた
同時にリクは気絶した

く観戦所く

「リクが、負けた！？」

ソラは、モニターを見て驚いていた

「リクも独自のスタイルで戦っていたけど、シグナムをあそこまで
追い詰めたのはすごいね」

「シグナムさん、リク君を連れて戻って来て」

「了解だ。高町」

なのはは、シグナムに連絡した

「これで、模擬戦も含めて全て終了だよ」

「この模擬戦は、なのためにやったんだ？」

ソラは、質問した

「それはね。模擬戦のデータをもとにしてソラ君とリク君のデバイスを作ろうと思うの」

なのはは、質問に答えた

「デバイスってフェイトやシグナムが使ってる武器のことか？でも俺とリクは、キープレードを持てるから必要ないんじゃないか？」

「それもそうなんだけど、管理局に登録するときに必要なだし、サポートもしてくれるからいいと思うよ」

「そうか。デバイスってすごいな」

ソラは、理解した。

「ただいま戻った。シャマル、リクの治療を頼む」

「わかったわ」

「とりあえず今日は、体を休ませてね」

「おう」

そして模擬戦と検査は終了した

模擬戦と検査 その4（後書き）

更新が不定期ですが引き続き愛読よろしくをお願いします

闇の存在（前書き）

どうもニクスです

今回は、闇の存在が登場します
では、どうぞ

闇の存在

「????」

「やあ、もう来ていたんだな。俺が最後か」

ひとりの青年は、集まった他の人達がもう集まっていたのを知った

「さて今回集まって貰ったのは、『キープレードに選ばれし者』がこの世界に突然現れたことについてだ」

「ふーん、ついにこの世界に来てくれたんだね。なら計画が始まるのかい？」

「ああ、ついに開始することができる。彼らの世界ではことごとく阻止されてしまったが、今回は我々の他に、この世界からも協力者が来てくれたからな。彼には表で動いてもらって、我々は裏で準備を始める」

「『ハートレス』・『ノーバディ』・『アンヴァース』それぞれの闇を使い、キープレードに選ばれし者にも働いてもらおうじゃないか」

「それじゃ、その準備はあんたたちに任せて俺は彼らと共にキープレードに選ばれし者がどんな奴か見てくるよ。あんたたちは、知ってんだろ」

「ああ、彼の心は強く、そして彼の周りにいる者達の絆のまた彼の力になっている」

もう一人の男は話した

「もう一人は、自ら力を欲し闇に身を染めていたが、彼は『狭間のキーブレード』に選ばれた」

そしてもう一人の男も話した

「ふうん、俺の知る『キーブレードマスター』とは違うな。でも、そうでないと面白くないや」

「それじゃ、そろそろ行こうかな」

そして青年は闇のゲートを作り消えた

「さあ、これから我々の計画が始まる」

「そして手に入れる『キングダムハーツを』」

闇の存在（後書き）

キングダムハーツシリーズをプレイ方はわかると思います
プレイしていない方のために話の中で説明していきます
では、また

光と闇の相棒（前書き）

どうもニクスです

今回は、バリヤジャケットと名前が悩みましたがデバイスが出てきますよ

では、どうぞ

光と闇の相棒

（機動六課）

模擬戦と検査が終わってから3日がたった

ソラとリクは、屋上にいた

「なあリク、この世界で俺たちは何をすればいいんだろうな」

「さあな。でもこの世界でも何かが起こるんだろうな」

「たしかに、俺たちが行く先々何かが起きてるからなあ」

ソラは、自分が行った他の世界で必ず問題が起きていることを思い出し否定は出来なかった

「それに、今はやてたちが抱えてる事件はもしかしたら俺たちにも関わりがあるのかもしれないな」

「ああ。でもハートレスもノーバディもない。俺たちは、はやてたちの力になるのかなあ」

「でも、ソラはそれでもやるだろ」

「当たり前だろ」

ソラは笑顔で答えた

すると屋上に新たな来客が現れた

「あつ、ここにいたんだね。ソラ・リク」

「なのはとフェイトじゃん。どうかしたのか？」

「二人の姿が見当たらないから探してたんだよ」

「何かあったのか？」

「それじゃ、発表しまゝす。二人のデバイスが完成しました」
なのはとフェイトは、拍手をしながら発表した

「本当か！？なのは、フェイト」

「本当だよ。二人の模擬戦のデータを何度も何度もチェックして何とか間に合ったんだよ」

「ありがとう。二人とも」

「それじゃ、ついてきてね」
4人は、研究所に向かった

↓機動六課 研究所↓

研究所に到着したのはが扉をノックした

「シャーリー、入るよ」

「どーぞー」

扉を開き中に入って行った

中は、ケースやパソコンなど色々用意されていた
そして、そこにはひとりの女性がいた

「はじめまして、私はシャリオ・フィニーノといいます。シャーリ
ーって呼んでね」

「俺はソラ、よろしく」

「俺はリク、よろしく頼む」

二人は、シャーリーと握手をした

「それじゃ、二人のデバイスはこのような感じに完成しました」

するとケースに光が灯り白と黒のブレスレットがあった

「これがデバイス？」

「そう、今はまだ眠っている状態でこの子たちは名前もないんだ」

「デバイスは、持ち主のために沢山学んでアドバイスや戦闘のサポートもしてくれる」

「言わば『相棒』ってことか」

「そう、それで能力はどんな感じになってるんだ」

リクは、デバイスに関して質問した

「現在は待機モードで、起動すると二人のキープレードの形をベースにしたブレードモードになります」

シャーリーは、モニターでデバイスの能力を説明した

「でも、基本は待機状態でも魔法や現場の情報も展開できてブレードモードはあくまでもおまけのようになってるの」

「おまけ？なんでだ？」

「ソラたちはキープブレードがあるから普段はそっちの方がいい思っ
てね」

「たしかに、使えなれた方がいいしな」

「それじゃ、この子達に名前をあげて」

「ああ」「わかった」

ソラは白のブレスレット、リクは黒のブレスレットを持った

「マスター認証 ソラ 私に個体名称を登録してください 愛称『
ライト』正式名称『ライト・トワイライト』」

「マスター認証 リク 私に個体名称を登録してください 愛称『
ダーク』正式名称『ダーク・デステイニー』」

「ライト・トワイライト」

「ダーク・デステイニー」

「「起動」」

二人のデバイスは起動し魔方陣を展開

二人はバリアジャケットを身に付けた

ソラは全体が白をベースにしたフード付きコート　ラインは赤
口は黒で出来たバリアジャケット
リクは全体が黒をベースにしたフード付きコート　ラインは青
口は灰色で出来たバリアジャケット

デバイスがブレードモードで展開している

「これが俺たちのデバイスかゝスゲー」

ソラはとても嬉しくテンションが上がっていた

「服が変わっているな」

リクはバリアジャケットを見ていた

「何か13機関に似てるな」

「たしかにでも俺はこの姿に慣れてるからな」

「そう言うお前は俺とほとんど同じなんだよ」

リクは、ソラのバリアジャケットを見て質問した

「うゝん、なんでだろうな。ロクサスを思い出してな」

「なるほどな」

ソラとリクを見ていた三人は思った

（（二人とも、凄くカッコイイ））

光と闇の相棒（後書き）

今回はここで終わりです

とりあえずでデバイスは欲しかったので登場させました

でも、基本はサポートですよ

バリアジャケットは、13機関のコートをベースにしました

でもあのコートは、下まで隠してるのでイメージはシグナムの腰のコートみたいに開いてます

もちろんズボンも履いてるからね

ただソラは、あのズボンだと何か合わないので普通のズボンにしました

では、こんな感じです

お気に入り登録してくれたユーザーさんありがとうございます

見てくれるユーザーさんもありがとうございます

でも、感想やアドバイスなどいただくと助かります

自分でも書いていたまに、読みやすいのかな～表現が伝わってるかな～と思いつながら書いています

では、ノシ

番外編 みんなでお正月（前書き）

どうもニクスです

今回はアクセスが20,000を超えたこととお正月でもあるので番外編をつくりんました
では、どうぞ

番外編 みんなでお正月

〽機動六課 隊長室〽

はやては、景色を見ていた

はやて「はあゝ」

ため息をついているのリインに見られた

リイン「どうしたんですか？はやてちゃん」

はやて「あんなあ、暇なんよ」

リイン「え？暇？」

リインは、はやての言葉が理解できなかった

はやて「何もない。こんなじゃ退屈で死んでしまう」

リイン「そんなにですか！？」

はやて「はあゝ、つまんない。うん？」

リイン「今度は、どうしたんですか」

はやて「これやーーーーー！？」

いきなりはやては、立ち上がった

機動六課 ロビー

そこには、隊長達、フォアドメンバー、ロングアーチ、リクとソラ、機動六課にいるメンバー全員が集まっていた

はやて「ええ、今日みんなに集まってもらったのは発表することがあるんです」

場は静まり、はやての発表を待った

はやて「いゝゝゝまゝゝゝかゝゝゝら、お正月の準備をします」

みんな「」「」「」「」「」「」「」「」「」「」「」「」「」「」「」「」

ここでもはやての言葉に、みんな思考がついていけなかった

はやて「だゝゝかゝゝら、私たちの世界の日付では今日は12月31日で、私やなのはちゃんのふるさとでは年が変わる時にみんなでドンちゃん騒ぎをして変わるのを待つんよ」

なのは「はやてちゃん、違うから!!」

なのはからツツコミが入った

なのは「本当は、その年を無事に過ごして新年を祝うためにする行事のことなんだ」

スバル「へーそうなんですか」

フェイト「その時に料理とかを作って食べたりするけどね」

ティアナ「それじゃ料理するんですか」

はやて「せや、いつ何が起きるかわからんし今のうちにやっというた方がええやん。そんじゃ、フォードメンバーとソラとリクは、餅つきしてもらおうかな」

はやて「んで、ロングアーチメンバーは隊舎の清掃宜しく」

はやて「隊長組は、料理にかかるよ」

はやて「それじゃ、解散」

スバル「夜神隊長く餅つきってどうやればいいんですか？」

はやて「今教えるかな、待ってて」

はやて「んじゃ、なのはちゃん料理は先にはじめてええから」

すると、はやてはスバル達のところに向かって行った

く起動六課 食堂く

なのはたちは、食堂に移動していた

なのは「さて、何を作ろうか？定番だとおせちだけど時間的に間に合わないから、他の料理を沢山作ろうか」

フェイト「それがいいと思う」

シグナム「うむ」

ヴィータ「私は、食えりゃなんでもいいや」

なのは「それじゃ、始めようか」

そして、なのは達は料理に取り掛かった

〳機動六課 広場〵

はやて「そんじゃ、説明するでこのキヌとウスで餅をつくんよ。つくのはいいんやけど、周りを水で少しずつやって餅のをまんべんなくつくんや。分かったか」

フォアードメンバー「」「はい」「」

ソラ「おう」

リク「分かった」

はやて「はな、うちはなのはちゃんどこに戻るからね。ほな」

はやては隊舎に戻って行った

ソラ「それじゃ、やるか」

ソラは張り切っていた

エリオ「あ、あの」

ソラ「自己紹介がまでだったな。俺はソラ。よろしく」

リク「俺はリクよろしく」

スバル「私は、スバル・ナカジマ。スバルって呼んでね」

ティアナ「私はティアナ・ランスター、宜しく」

キャロ「わ、私はキャロ・ル・ルシエ、よろしくお願いします」

エリオ「エリオ・モンディアルです。よろしくお願いします」

全員握手を交わした

ティアナ「それじゃ、隊長達に待たせるのは悪いからさっさと始めるわよ」

スバル「そうだね、はじめるか！」

ソラ達は餅つきを始めた

〽夜 機動六課 食堂〽

機動六課のメンバーは全員集まっていた

はやて「それじゃ、みんなご苦労さま。今日はみんな楽しんでな

！そんじゃ、かんぱーい」

みんなは、宴を楽しんだ

ヴァイス「なんだ？この餅スッゲ伸びるぞ！？」

ヴァイスが食べていた餅は、器から口元まで伸びてた

スバル「あ、その餅私たちがつくりました」

ヴァイス「ほおんはへほおひるんはよ！？（どんだけ伸びるんだよ！？）」

ヴァイスのツツコミが入った

スバル「いやーそれほどでもないですよ」

ヴァイス「ほめてねえよ！？」

スバル「ひどーい。つくるのがすごかったんですよ」

ヴァイス「は？なんで？」

スバル「ソラとリクのコンビネーションがすごくて、それに負けな
いために私とエリオで頑張ってやっただからですから」

ヴァイス「本当か？ティアナ？」

ティアナ「ええ、本当にすごかったんですよ。スバルは、ウイング
ロードを使って高いところから落下してキヌで叩きつけたり、エリオ

はスピードを早めてやってました。見ていて呆れました」

ヴァイス「ありえねから！どんなスタイリッシュもちつきだよ！誰もやんねえよ」

その光景をソラとリクは見ていた

ソラ「本当に、面白いなみんな」

リク「そうだな。こうゆうのも悪くない」

ソラ「当たり前だろ。みんなというから心から楽しいと思えるんだろ」

リク「この絆も俺たちが守ろうな」

ソラ「ああ」

なのは達もみんなの姿を見ていた

なのは「みんな楽しそうだね」

フェイト「うん。みんな本当に楽しそう」

はやて「たまにはこうゆうのええな」

なのは「はやてちゃんの突然の思いつきには驚いたけどね」

はやて「ごめんなあ。でもこの集まりの1年でだけやしせめて楽しい思い出くらいあってもええかなと思ってなあ」

なのは「とてもいい考えだよ」

フェイト「エリオとキャロも楽しそうだしいいよ」

なのは「あっそろそろ新年になるね」

はやて「ほんまや！みんなそろそろ新年にかかります。変わったら「明けましておめでとうございます」って言うんやで、わかった？」

みんな「はい」

はやて「それじゃ、カウントダウンを始めるで10・・・9・・・8・・・」

なのは・フェイト「7・・・6・・・5・・・」

フォアードメンバー「」「4・・・3・・・」「」

リク「2・・・」

ソラ「1・・・」

みんな「0」

みんなで「明けましておめでとうございます」

番外編 みんなでお正月（後書き）

それでは、皆さん良いお年をノシ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2349y/>

魔法少女リリカルなのはStrikerS KH

2011年12月31日19時16分発行